

# Lien de ふれあいプロジェクト

「つながり」「居場所」「出番」と「安心」の支えあい

リアン文京 荒井充一  
野村美奈

## 1. はじめに

リアン文京は老人福祉センター、地域振興施設、子育て支援、障害者支援施設(入所支援、短期入所、生活介護、就労継続支援B型、自立訓練)、放課後等デイサービス、就労継続支援A型をはじめ地域活動支援センターや特定相談支援並びに居宅支援等の大小27事業を運営し、高齢者部門、障害者部門、子育て部門、地域部門を持ち、文京区小日向という都内住宅地に開設した都市型複合施設である。

リアン文京のリアン(LIEN)は仏語で「絆 つながり」を意味し、法人理念のもと地域に「絆社会の実現を目指す」ことをミッションとした。開設当初よりその実現に向け、組織横断的な21のプロジェクトチームを結成し、それぞれが「絆社会の実現」を目標に掲げ活動している。本報告書はその中の「Lien de ふれあいプロジェクト」(以下「ふれあいPJ」)の一年間の軌跡である。

## 2. KJ法による地域課題の抽出

近年、ひとり暮らし高齢者や高齢者のみの世帯だけではなく、高齢者と中高年の子ども、障害児・者とその介護、支援をしていた親や兄弟といった家族で暮らしている世帯において孤立死が相次ぎ社会問題化している。これらの事例はこれまで社会福祉が想定してきた以上に社会的孤立のリスクが高まっていることをうかがわせる。リアン文京においても法人の社会貢献は言うまでもなく、既存の福祉制度内のサービスだけで満足するのではなく、地域の社会的課題に積極的に関わる姿勢が問われる。

地域福祉の課題は要約すれば、地域住民の生活様式の多様化と社会経済の構造変化の中で、私たちがつながりの喪失により人々の孤立や貧困が見えにくくなっていることである。「ふれあいPJ」の意義は様々な活動を通じて、わずかであってもこれらの緩和、解消を図っていくところにある。

地域にどのような課題があるのかをKJ法により抽出したところ以下のような課題が浮上した。例えば、障害者部門では地域(リアン文京も地域の一部)には、共生社会の実現を阻む社会的障壁がある。地域での様々な場面での参加と活動の場づくりやインクルージョンの考えを、イベントや講座等を通し提案することが重要である。

シニア部門では単身世帯並びに貧困の課題がある。また、60歳代の定年退職シニアの地域での居場所づくりや社会への貢献も重要課題であるため、単身世帯向けの企画やシニアボランティアの導入などを実施することが必要である。

子育て部門では、少子化や核家族、共働き世代の増加に伴い、乳幼児の子どもを抱えた親の孤立感が増加し、育児不安感が広がっている。親の多くが周りからの育児

批判を気にしており、他者の子育ての様子をみることができないなど、子育てのしにくい状況に置かれている。離婚数の増加や母子家庭の貧困問題も大きな課題である。子育て支援における育児指導や子育てサークル等への支援などを行っていくと共に、団塊世代の社会的貢献等と絡めて育児サークル運営支援を検討していくことにした。

地域住民部門では、稼働世代の青年や中高年の中には自分の知識や技能を生かした地域貢献における潜在的な動機を持っているようなのでこうした層を取り込むことを検討していくこととした。

特にリアン文京の地域イベントの場を活用して、市民活動団体との連携や協働のあり方を検討し、共同事業を提案することとした。女性層は、ボランティア活動への参加に対する意識と動機が高く、こうした女性層の活動の場を設定できたらと考えた。

障害者支援施設であるリアン文京は入所施設であるが、施設の利用者以外のニーズに直接・具体的に接する機会が乏しい傾向にある。職員の意識が分野ごとの制度内サービスに集中し、制度の狭間のニーズを意識的に把握する視点が弱いことを踏まえ、当初より自分たちなりに地域社会の課題を把握し、ニーズに向き合うことを行った。自らが取り組むべきテーマを地域の中から発見することはその後の「ふれあいPJ」のメンバーの参加動機を高めることになったと思う。

基本的方針としては、文京福祉センター江戸川のシニアプログラムや地域振興施設の自主事業、リアン文京の地域イベントを中心に、様々な人が集まれるゆるやかなたまり場や居場所を設けることによって、つながりを促し、様々なニーズが浮かび上がらせていき、ささやかでも良いので地域住民の「つながりの喪失」を解消するために具体的にアクションを起こしていくこととした。

### 3. プロジェクト計画

「ふれあいPJ」の開始するにあたっては、闇雲に場当たり活動するのではなく、きちんとした活動計画を立て継続的に行っていく必要があると考えた。そのため、「ふれあいPJ」が何を目指すのか、そのゴールは何かを具体化する作業から入った。

リアン文京の各事業は法内法外のサービスに限らず「共生社会」「多世代交流」「地域福祉」といった事業目的をいずれも有している。しかし、これらの目的が事業の縦割りの枠組みで行われる事が多く、高齢者は高齢者、障害者は障害者というように対象者が限定されてしまう傾向にある。そこで、複合施設の機能を集結させインクルーティブに行うために具体的な指標を立て、この指標の実現にむけたプログラムを検討することとした。

計画策定にあたっては、現状分析⇒課題抽出⇒目標設定⇒計画策定⇒実践⇒評価⇒フィードバックの7つのステップで考えた。現状分析は文京区の地域福祉計画等の既存資料を参考にし、ワークショップではKJ法によって現状分析と課題抽出を行った。課題を抽出後、「何を進めるのか」だけでなく「どのように進めるのか」を重視した。その結果リアン文京の一体的運営の中で様々な人が集まれるゆるやかなたまり場や居場所を設けることを基本ベースとした。

計画推進にはプロジェクトリーダーが評価とフィードバックを定期的に行うことが必要不可欠であり、参加メンバーとの振り返りを重視した。計画はソフト面やハード面、運営の方法、参加形態他に不可欠なのが財源面の検討である。

開設期ということもあり、介護報酬等の収入には手をつけず地域に向けた取り組みのための独自財源の確保が求められた。そこで「ふれあいPJ」の原資は福祉実習生の謝礼を充て、地域交流・地域貢献に還元することとした。今年度は年間で実人員 1,860名の介護等体験者や福祉実習生がリアンで実習をし、その謝礼収入 280万円を充てた。次世代の福祉人材を育成することは非常に大切であり、地域貢献の原資に還元することによって実習生の受け入れ意義がさらに大きくなったと思われる。

リアン文京の開設期の取り組みとしては早期にリアン文京を地域の人に知ってもらうことが求められた。最初に形成されたイメージの影響は大きく、地域住民のリアン文京の好感度がそのまま数年先に計画している利用者の地域進出の土壌を作ることにつながることを意識した。また、目的をはっきりさせるために具体的な指標を作ることとした。

リアン文京における「共生社会指標」(別紙 1.2)は、青少年、障害者、高齢者、地域住民、子育て世代の分野を横断的視点でつなげられる指標を、チームメンバーが KJ法によって抽出した。結果、横断的視点 1 は「リアンに帰属意識をもつメンバーによる地域コミュニティの形成」、横断的視点 2 は「支え、支えながら、全ての人が様々な形で参加・貢献できる社会」が抽出され、共通項目として「価値観の共有」「地域への貢献」「多様な働く場」「社会的障壁」「他者への関心」の概念に集約された。

この指標に沿って各分野に向け「ふれあいPJ」を展開した。地域で起きている様々な問題は、つながりや支えあう関係性を持つことの困難さであり、問題解決としては、相互に信頼関係のある「つながり」と「居場所」、誰もが活躍できる「出番」づくり、そして「安心」して支え合える暮らしの実現である。

これらを念頭に計画を立てた。取り組みの柱としては、1.多世代間交流、2.たまり場・居場所づくり、3.施設マグネット化、4.シニアプラン「きょういく処」、5.福祉教育、6.活動と参加の場づくり、の 6 つを設けて取り組むこととした。6 領域と代表的なプログラムを表にしたのが下表である。

つふれあいPJの代表的取り組み (定義)	代表的プログラム
多世代間交流 (あらゆる世代による相互交流の機会)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・縁が和@CaféBUNBUN</li> <li>・シネマサロン・カフェコンサート・LIEN クッキング</li> <li>・その他 多世代交流プログラム</li> </ul>
居場所づくり (居場所 共有する場所 共有する活動)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・なごやかクラブ ・子育てサークル</li> </ul>
施設マグネット化 (「人をひきつける」魅力ある施設づくり)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文京福祉センター祭り</li> </ul>
シニアプログラム「きょういく処」 (目的を持って集う、教育 共行)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自主サロン化サークル化事業</li> <li>・脳トレマージャン・スポーツ吹矢・写経・デコパージュなど</li> </ul>
福祉教育 (子供たちに福祉の心を育む)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ふくしの話</li> </ul>
活動と参加の場づくり (役割と出番)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ぶんぶんマルシェ ・プチ預かり ・作家発掘プロジェクト</li> </ul>

### 3.6 つの取り組み(実践報告)

紙面の関係上、代表的な6つの取り組みを報告する。

#### (1)多世代間交流 「縁が和 @Café'BUNBUN」

1階のCaféBUNBUN(以下Café)で認知症カフェとしてスタートした多世代間交流プログラムである。Caféは当初よりコミュニティカフェとしてのカフェコンサートなどを企画してきたが、その経緯から地域にある子育てサークルや傾聴ボランティア、文京区社会福祉協議会、小日水町会等と接点が生まれた。ここからCaféで何かしらできないかといった世間話、井戸端会議的に自然発生的な「地域のつぶやき」を拾い、「多世代間交流」をキーワードに多世代間交流カフェを実施する構想が生まれた。

次に、リアン文京が前面に出るのではなく、参画する地域市民家や団体と対等平等な関係で運営していくことが地域における多世代間交流を促進すると考え、改めてワールドカフェ方式で「地域に何が必要か」「CaféBUNBUNでできる地域交流は何か」をテーマに話し合った。その結果、実行委員会形式で開催するスタイルを採用した。

縁が和(えんがわ)の意味は日だまりの縁側のように誰でもが気軽に座っておしゃべりできる場所で、縁が輪となってひろがりますように、和やかな縁が続きますようにという願いが込めて名づけた。

毎月第四日曜日に認知症高齢者の方やその介護者、子ども、大学生、地域住民が30名ほど集まっている。カフェをしながら様々な交流ができるような仕掛けを用意した。ゲームや折り紙、あやとり、お手玉などの遊び道具を用意したり、ぶんぶんストアでは駄菓子屋さんを開いて、大人から子どもまで駄菓子や昔遊びの玩具に興る時間を共有している。

また、多目的室を開放して自由に遊べるスペースを作り、別の市民活動家を招いて絵本の読み聞かせや保育士のパネルシアターなどのミニイベントを行った。ここにはリアンの利用者も参加し自然な形での多世代交流が実現している。

カフェには近隣町会の方やサークルで知り合いの方だけではなく、毎回数人は友だちを誘っての参加があり、「1人暮らしの人を誘ってきました」など人と人との新しいつながりを生み始めている。さらに本会を継続しつつ街中に別の多世代交流カフェを催したいと考えている。

#### (2)居場所づくり なごやかクラブ

「なごやかクラブ」はひとり暮らしや家庭に引きこもりがちな65歳以上の高齢者を対象にした、仲間づくりや健康維持を目的とした生きがいつくりである。仲間づくりが目的であるため単発の講座ではなく、定員20人で複数回(20回)行った。

内容はゲームのような形式で体を動かす輪投げやカーレット(卓上で行うカーリング)、栄養士によるクッキング、看護師による健康講座、行政書士による成年後見講座、警察による防犯講座(振り込め詐欺予防など)などバリエーション豊かなものにした。

結果として前後期の年間40人、のべ400人の参加があった。参加者の中には伴侶を

亡くされて自宅にこもりがちだった一人暮らしの方が、「なごやかクラブ」の中で知り合った方と友だちになったり、他のいろいろな講座に積極的に参加されるなど大変効果をあげている。今後はこの経験を生かし、介護予防・日常生活支援総合事業等にチャレンジしていく予定である。

### (3)施設マグネット化 『文京福祉センター祭り』

リアン文京は地域の福祉拠点として、魅力ある福祉施設づくりを目指しているが、施設マグネットとは「行ってみたい、また来てみたいと思われる“人をひきつける施設”」のことである。そのためには「場」を共有することが重要である。

場では「居場所の共有」「活動の共有」が大切であり、ひとり一人の関心ごとが多世代間で共有されることが大切だと考えた。そのため、前夜祭から本祭、後夜祭までの3日間の地域イベントとして館内をフルに活用して様々な企画を用意した。先に述べたが、地域住民に魅力と感じる福祉施設のイメージ戦略が重要であることから体験型のワークショップなどを多く企画した。

地域イベントは地域ニーズを拾うアンテナショップ的な役割をもっている。来場する地域住民のニーズ調査を兼ねて様々な企画にチャレンジした。結果、3日間で5,700人以上の来園者を迎えることができた。舞台での発表団体数は35団体以上、1200名の参加であった。また、市民団体の発表展示では17団体、215名の参加があり、地域の福祉施設12事業所が模擬店や施設作品を販売した。体験型のワークショップは15団体が参加した。

このイベントを通じ、大学生124名、市民団体や福祉団体、大学サークル等の56団体がボランティア登録しており、リアン文京の人的社会資源のリソースとなっている。

### (4)シニアプログラム「きょういく処」

シニア向けのプログラムとして「つながり」「居場所」を重視した健康増進と生きがい促進のためのプログラムを実施した。シニアの方がひとり一人目的をもって文京福祉センター江戸川橋へ「共行（仲間と行く、過ごす）」「教育（学習・教養を高める）」「共育（ともに育みあう）」を求めて、元気に今日行く処となるような取り組みとした。シニアプログラムは「運営の主体化」を意識して取り組んでいる。まず体験をしてもらう「導入期」、次いでプログラムを楽しみ味わってもらう「体験期」、そしてプログラムの実施を通じて仲間意識を醸成する「仲間形成期」、さらに職員主体からプログラムの中で、準備や司会、企画提案などをしてもらい運営に一部参画する「運営移行期」を経て、プログラム終結に向けてシニアのメンバー自身がサークルを運営していく「メンバーの運営主体形成期」、独立した自主サークルを側面からサポートする「運営支援期」へと主体のあり方を変えて、自主サロン化サークル化を促進している。

高齢者像を弱々しいイメージとして認識せず、「脳トレ麻雀」「スポーツ吹き矢」「写経」「Lien クッキング」など活気のある講座を企画した。麻雀や吹き矢などはゲームを楽しむだけでなく、仲間と一緒に出来るものとした。

ルールを覚え、麻雀牌を触る手の感触などが脳の刺激になり、吹き矢を吹くことで肺活量をアップするなど知識、教養、健康面、そしてコミュニケーションと仲間作りなどいろいろな効果を狙った。結果、講座は常に満員となり、さらに次の展開として講座に出られた方が自分たちで麻雀や吹き矢のサークルなどの仲間を作って、その団体に部屋を借りて楽しまれるようになっている。

## (5) 福祉教育

リアンの「共生社会指標」にあるように他者への共感を若い世代に育成することは大変意義があり、福祉教育は現場だからこそ効果的に行える内容があると考えている。近隣の小中学校の生徒に施設見学だけでなく福祉読本をもとにした「ふくしの話し」を行っている。また、高校生に対して介護等体験ツアーなどを行った。「ふくしの話し～みんなに関係すること」と題して、法人の理念やリアン文京在籍の障害当事者の語りを行った。

また福祉についての教育以外に、現在文京区で行われている経済的困難家庭の子どもたちに対する学習支援も活動の視野に入れていきたい。

特に当事者の語りは子供たちがいつの間にか背筋を伸ばし前傾姿勢となる程、熱心に聞き入る情景を目の当たりにすると当事者のエンパワメントを含め、さらに研究していきたい内容である。来年度以降は、「福祉読本(リアン版)」を作成していく。

一方、文京福祉センター祭りでの福祉体験コーナーやこども介護教室、「縁が和@Cafe'BUNBUN」(以下「縁が和カフェ」)でのミニ福祉教室なども今後さらに充実させていく予定である。

## (6) 活動と参加の場づくり

### 1) 「ぶんぶんまるしえ」

地域の方を呼び込み、協働していく取り組みの一方で、リアン文京の利用者を含めた障害当事者の社会参加にとって「参加と活動」は重要な視点である。「ぶんぶんマルシェ」はその社会参加を促進するプログラムである。リアン文京の運営コンセプトの1つに障害者アートの作家発掘があるが、「ぶんぶんまるしえ」はその目的をもって開始するものである。パラリンアートという障害者アーティストを発掘する社会貢献プログラムがあるがこれと提携して、障害者アーティストの発掘を目指している。

いろいろな定義はあるかと思うが、作家とは何かと考える時、リアン文京では「自ら市場に作品を出して売れたら作家」と定義した。そのために、本人が自分で値段をつけて作品を売る場を作ろうと考えた。それが「ぶんぶんまるしえ」である。

基本的には、1階エントランスにある「ぶんぶんストア」に販売展示スペースを設け、障害者・高齢者の作品の委託販売を行う仕組みである。しかしながらリアン文京は様々な障害福祉サービスを実施しているが、そのサービス構造自体が利用者の権利を狭めていないかという意識は常に持つておく必要がある。

リアン文京では就労継続支援B型を行っているが、ここでの自主作品づくりは事業

収入となり、施設の基準で工賃に反映される。この時、支援者側は利用者の作品や自主製品について正当な評価を下しているのかという視点を持つ必要がある。「ぶんぶんまるしえ」はこうした問題の一つのヒントとなる気がしている。自分のつけた作品の買値 85%が本人の取り分で、15%がまるしえ側の取り分となる。15%の収益はアーティスト発掘のための「アトリエ教室」の運営に還元していく予定である。

自分が売りたいと思うものを自分で値段をつけ、売りに出す、という一連の行為は地域社会(市場)と直接当事者が向き合う形となる。売れるにこしたことはないが売れなくても自分の作品を売るという「作家」としての社会参加のあり方がある。

## 2) 「お預かりプチ」

「お預かりプチ」は子育てサポーター育成と普及のために行うものである。これは、保育園に預ける前の預け先がない家庭の支援が目的である。文京区の子育てサポーター認定制度講習の卒業者に活躍の場所を提供するとともに、現場での育成指導を行う。

使い方としてはちょっと美容室や買い物をしたいといったお母さんのため、3 時間程度の短い時間お預かりするというものである。しかし研修を受けたサポーターといっても預かる側としては不安があり、その解消のため子育てひろばの保育士の見守りの中で活動をするというものである。「ふれあい PJ」としては単に子育て世代対象のみの事業ではなく、シニアやミドルシニアの出番と子育て支援を絡めて運動を展開していく予定としている。

地域活動は 3 つのコーディネート機能が必要であると思われる。1 つはボランティア等の人的資源、2 つ目は地域での「居場所」の確保、そして 3 つ目が地域住民の「つぶやき」からニーズを拾い社会資源とマッチングさせるコーディネート機能である。

「ふれあい PJ」は 3 つめの機能が特に必要だと感じている。

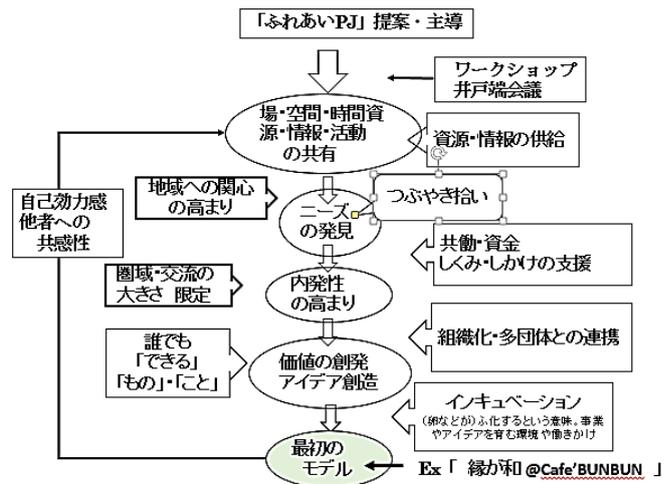
## 7. 考察

この一年間の「ふれあい PJ」の活動を振り返り、今後の活動基本枠組みを整理すると図 1 のようなプロセスとなる。

まず、最初に「ふれあい PJ」が Cafe おけるコミュニティカフェ構想があり、次いでリアン文京の様々な地域イベントや講座を通して、地域の方の「つぶやき」を拾い、ワークショップを開催した。井戸端会議的な自由な発言空間で「つぶやき」が温められ、「多世代間交流」にメンバー間のニーズが発見(集約)された。カフェという場や、リアン文京での様々なイベントやプログラムを囲みながら、地域の人々のつぶやきを拾いニーズを見つけた。

そして参加団体やサークル、町会、民生委員等とのつながりが生まれ、各自の知恵を出し合い、協働の仕組みや運営経費について知恵を出し合った。利用できる助成金、提供できる資源(人、場所、他市民活動団体、時間等)を話し合った。このことが「緑

図 循環モデル



が和カフェ」での「多世代間交流」に向けたメンバー間の動機付けを高めた（内発性の高まり）。

一方、地域への関心の高まりは思いが強すぎて、多様なアイデアの拡散に流れる傾向にあり、具体性に乏しいものもあった。そこで各自が対等に役割分担を担うこととし、みんなが実行委員会形式で運営していくことにした。

これによりメンバーに当事者意識が生まれ、どの範囲で行うのか、自分たちが

できる「もの」「こと」は何かを焦点化していった。より具体化していくことが活動の成否を決定する鍵の一つである。また、この間を通じて「ふれあいPJ」はふ卵機のようにアイデアの卵を大切に温め孵化させる役割の一端を担える力を養うことが必要だと考えている。

こうして「多世代間交流」の最初のモデルが誕生した。このモデルの運用を通じてメンバー間の自信や他のメンバーの所属する団体やサークルの事情や背景、困った感を共有することになった。リアンの共生社会指標の他者の共感性はこのような共通体験を通じて育まれていくと感じた。

そして、さらに場(空間、時間・資源・情報、活動)の共有化を生み、循環的に新しい価値やアイデアを生み出していく。

別紙3は「縁が和カフェ」の成長過程を図にしたものである。プロジェクトの想いからスタートする第Ⅰ期の「ふれあいPJの主体形成期」、カフェにおける空間、時間、参加者の資源、活動内容の共有化が促進し、関係者のつながりが形成される第Ⅱ期の「場の形成」、そして、「つぶやき」が一つのアイデアへと収斂される第Ⅲ期の「アイデアの凝縮」を行い、具体的なプラン(アイデアの卵を生み出す)が計画され、新しい価値やアイデアを取り込み「最初のモデル」である「縁が和カフェ」が誕生した。毎月1回カフェを開いて、カフェのあとには実行委員でおしゃべりしながら、次回につなげるサークルやアイデアを持ち寄りゆるく楽しく続けている。その時は都合の悪い人は無理せず帰るし、出来る人が出来ることを、出来る範囲で続けているだけである。

(お金を集める、絵本を読む、場所を提供する等)それが長続きをさせるコツである。

今後、第Ⅳ期の「つぶやきの発酵」(アイデアの卵が孵る)の局面にあり、先に述べた循環プロセスをめぐって第Ⅴ期の「新しい卵を産む」に向かうところである。運営を通じて、カフェと一緒に囲みながらたくさんの「つぶやき」を拾い、ニーズを抽出してきている。新しいキーワードは「学習支援」「働き世代の孤食とつながり」「経済的困難家庭の支援」「地域の見守り」等である。新しい卵を生み出し、この「卵」をいろいろな人や仕組み、続けていける資金の調達などを見つけながら温めている。

この「縁が和カフェ」を通してわかったことは小さなつぶやきの1つ1つが地域の

ニーズであり、それを捨てるためには一定の場を共有することが非常に重要だということである。そしてもう1つ大切なことは無理なく持続可能な方法を導きだし仕組みを作ることである。それぞれが無理せず続けられることがその事業から次の事業に循環させていくエネルギーとなる。循環を通して、1つの事業を変化なく続けるのではなく、常に地域のニーズに即した取り組みとして新たなアイデア・仕組みとして展開されていくことが重要であると思う。

## 8. まとめ

この1年間でリアン文京を訪れた方は、障害福祉サービスを利用されている方を除いても、延べ13万人となる。障害福祉サービスの利用を含めると、実に年間で16万人が利用している。このうちいくつかは「ふれあいPJ」がパイロット的に行った企画が事業化したものである。今後さらに私たちは13万人を15万人に増やす計画であるが、単に利用数の量的拡大だけではないと思っている。実情をみると、リアン文京を訪れている人たちは、各事業・プログラムとご本人の縦方向の交通しかない。各利用者がリアン文京という建物を共有しながら相互に交通するつながりの場とはなっていない。都市型複合施設という機能を最大限に使って、集った人々が相互にふれあいをもち、横のつながりのある「場」を作っていくことである。

その際に重要になるのが「ゆるく」というキーワードである。リアンのプロジェクトチームは専従者がいるわけではない。本業とのバランスを崩さず行っていく必要がある。「縁が和カフェ」の活動を通して地域の活動をしている皆さんから良く聞かれる言葉はこの「ゆるく」である。ゆるくつながりながら、自由な発想で互いがつながっていく感覚が大切である。そうでないと時として行き詰ってしまう気がする。「福祉」を仕事としている私からすると、一番苦手なのではと感ずることがあるが地域の人と関わる上でとても大切な感覚だと思う。

来年度「ふれあいPJ」ではセカンドハーベストというフードバンクの団体と文京社会福祉協議会、リアン文京で共同事業を企画している。リアン文京にフードバンクからの寄贈食品を備蓄し、利用者が地域の貧困家庭等に配布する取り組みを計画している。配布はリアン文京の地域見守り機能を兼ね、文京社会福祉協議会には地域にニーズを把握してもらおう。互いの「強み」を生かした地域プラス ONE 活動になると思っている。